老いたる素戔嗚尊

芥川龍之介

一

高志（こし）の大蛇（をろち）を退治した素戔嗚（すさのを）は、櫛名田姫（くしなだひめ）を娶（めと）ると同時に、足名椎（あしなつち）が治めてゐた部落の長（をさ）となる事になつた。

足名椎は彼等夫婦の為に、出雲（いづも）の須賀へ八広殿（やひろどの）を建てた。宮は千木（ちぎ）が天雲（あまぐも）に隠れる程大きな建築であつた。

彼は新しい妻と共に、静な朝夕を送り始めた。風の声も浪の水沫（しぶき）も、或は夜空の星の光も今は再（ふたたび）彼を誘つて、広漠とした太古の天地に、さまよはせる事は出来なくなつた。既に父とならうとしてゐた彼は、この

宮の太い棟木（むなぎ）の下に、——赤と白とに狩の図を描いた、彼の部屋の四壁の内に、高天原（たかまがはら）の国が与へなかつた炉辺の幸福を見出したのであつた。

　彼等は一しよに食事をしたり、未来の計画を話し合つたりした。時々は宮のまはりにある、柏の林に歩みを運んで、その小さな花房の地に落ちたのを踏みながら、夢のやうな小鳥の啼く声に、耳を傾ける事もあつた。彼は妻に優しかつた。声にも、身ぶりにも、眼の中にも、昔のやうな荒々しさは、二度と影さへも現さなかつた。

　しかし稀に夢の中では、暗黒（くらやみ）に蠢（うごめ）く怪物や、見えな

い手の揮(ふる)ふ剣(つるぎ)の光が、もう一度彼を殺伐な争闘の心につれて行つた。が、何時も眼がさめると、彼はすぐ妻の事や部落の事を思ひ出す程、綺麗にその夢を忘れてゐた。

　間もなく彼等は父母になつた。彼はその生れた男の子に、八島士奴美(やしまじぬみ)と云ふ名を与へた。八島士奴美は彼よりも、女親の櫛名田姫に似た、気立ての美しい男であつた。

　月日は川のやうに流れて行つた。

　その間に彼は何人かの妻を娶(めと)つて、更に多くの子の父になつた。それらの子は皆人となると、彼の命ずる

儘に兵士を率ゐて、国々の部落を従へに行つた。

彼の名は子孫の殖えると共に、次第に遠くまで伝はつて行つた。国々の部落は彼のもとへ、続々と貢(みつぎ)を奉りに来た。それらの貢を運ぶ舟は、絹や毛革や玉と共に、須賀の宮を仰ぎに来る国々の民をも乗せてゐた。

或日彼はさう云ふ民の中に、高天原の国から来た三人の若者を発見した。彼等は皆当年の彼のやうな、筋骨の逞(たくま)しい男であつた。彼は彼等を宮に召して、手づから酒を飲ませてやつた。それは今まで何人(なんぴと)も、この勇猛な部落の長から、受けたことのない待遇であつた。若者たちも始めの内は、彼の意嚮(いかう)を量(はか)りかねて、

多少の畏怖を抱いたらしかつた。しかし酒がまはり出すと、彼の所望する通り、甕(みか)の底を打ち鳴らして、高天原の国の歌を唱つた。

彼等が宮を下る時、彼は一振の剣を取つて、

「これはおれが高志(こし)の大蛇(をろち)を斬つた時、その尾の中にあつた剣だ。これをお前たちに預けるから、お前たちの故郷の女君(をんなぎみ)に渡してくれい。」と云ひつけた。

若者たちはその剣を捧げて、彼の前に跪(ひざまづ)きながら、死んでも彼の命令に背(そむ)かないと云ふ誓ひを立てた。

彼はそれから独り海辺へ行つて、彼等を乗せた舟の帆が、だんだん荒い波の向うに、遠くなつて行くのを

見送つた。帆は霧を破る日の光を受けて、丁度中空を行くやうに、たつた一つ閃いてゐた。

二

しかし死は素戔嗚夫婦をも赦(ゆる)さなかつた。

八島士奴美(やしまじぬみ)がおとなしい若者になつた時、櫛名田姫はふと病に罹(かか)つて、一月ばかりの後に命を殞(おと)した。何人か妻があつたとは云へ、彼が彼自身のやうに愛してゐたのは、やはり彼女一人だけであつた。だから彼は喪屋(もや)が出来ると、まだ美しい妻の死骸の前に、七日七

晩坐つた儘、黙然（もくねん）と涙を流してゐた。

　宮の中はその間、慟哭（どうこく）の声に溢れてゐた。殊に幼い須世理姫（すせりひめ）が、しつきりなく歎き悲しむ声には、宮の外を通るものさえ、涙を落さずにはゐられなかつた。彼女は——この八島士奴美のたつた一人の妹は、兄が母に似てゐる通り、情熱の烈しい父に似た、男まさりの娘であつた。

　やがて櫛名田姫の亡（な）き骸（がら）は、生前彼女が用ひてゐた、玉や鏡や衣服と共に、須賀の宮から遠くない、小山の腹に埋められた。が、素戔嗚はその上に、黄泉路（よみぢ）の彼女を慰むべく、今まで妻に仕へてゐた十一人の女たち

をも、埋め殺す事を忘れなかつた。女たちは皆、装ひを凝（こ）らして、いそいそと死に急いで行つた。するとそれを見た部落の老人たちは、いづれも眉をひそめながら、私（ひそか）に素戔嗚の暴挙を非難し合つた。

「十一人！　尊（みこと）は部落の旧習に全然無頓着で御出でなさる。第一の妃（きさき）が御なくなりなすつたのに、十一人しか黄泉（よみ）の御供を御させ申さないと云ふ法があらうか？　たつた皆で十一人！」

葬（はうむ）りが全く終つた後、素戔嗚は急に思ひ立つて、八島士奴美に世を譲つた。さうして彼自身は須世理姫と共に、遠い海の向うにある根堅洲国（ねのかたすくに）へ移り住んだ。

其処は彼が流浪中に、最も風土の美しいのを愛した、四面海の無人島であつた。彼はこの島の南の小山に、茅葺(かやぶき)の宮を営ませて、安らかな余生を送る事にした。

彼は既に髪の毛が、麻のやうな色に変つてゐた。が、老年もまだ彼の力を奪ひ去る事が出来ない事は、時々彼の眼に去来する、精悍(せいかん)な光にも明かであつた。いや、彼の顔はどうかすると、須賀の宮にゐた時より、更に野蛮な精彩を加へる事もないではなかつた。彼は彼自身気づかなかつたが、この島に移り住んで以来、今まで彼の中に眠つてゐた野性が、何時(いつ)か又眼をさまして来たのであつた。

彼は娘の須世理姫と共に、蜂や蛇を飼ひ馴らした。蜂は勿論蜜を取る為、蛇は征矢（そや）の鏃（やじり）に塗るべき、劇烈な毒を得る為であつた。それから狩や漁の暇に、彼は彼の学んだ武芸や魔術を、一々須世理姫に教へ聞かせた。須世理姫はかう云ふ生活の中に、だんだん男にも負けないやうな、雄々しい女になつて行つた。しかし姿だけは依然として、櫛名田姫の面影を止めた、気高い美しさを失はなかつた。

宮のまはりにある椋（むく）の林は、何度となく芽を吹いて、何度となく又葉を落した。其度に彼は髯（ひげ）だらけの顔に、愈（いよいよ）皺の数を加へ、須世理姫は始終微笑（ほほゑ）んだ瞳に、

益（ますます）涼しさを加へて行つた。

三

或日素戔嗚が宮の前の、椋の木の下に坐りながら、大きな牡鹿の皮を剝（は）いでゐると、海へ水を浴びに行つた須世理姫が、見慣れない若者と一しよに帰つて来た。

「御父様、この方に唯今御目にかかりましたから、此処まで御伴（おとも）して参りました。」

須世理姫はかう云つて、やつと身を起した素戔嗚に、遠い国の若者を引き合はせた。

若者は眉目の描いたやうな、肩幅の広い男であつた。それが赤や青の頸珠（くびたま）を飾つて、太い高麗剣（こまつるぎ）を佩（は）いてゐる容子（ようす）は、殆ど年少時代そのものが目前に現れたやうに見えた。

素戔嗚は恭（うやうや）しい若者の会釈（ゑしやく）を受けながら、

「御前の名は何と云ふ？」と、無躾（ぶしつけ）な問を抛（はふ）りつけた。

「葦原醜男（あしはらしこを）と申します。」

「どうしてこの島へやつて来た？」

「食物や水が欲しかつたものですから、わざわざ舟をつけたのです。」

若者は悪びれた顔もせずに、一々はつきり返事をし

た。

「さうか。ではあちらへ行つて、勝手に食事をするが好い。須世理姫、案内はお前に任せるから。」

二人が宮の中にはいつた時、素戔嗚は又椋の木かげに、器用に刀子（たうす）を動かしながら、牡鹿の皮を剝ぎ始めた。が、彼の心は何時の間にか、妙な動揺を感じてゐた。それは丁度晴天の海に似た、今までの静な生活の空に、嵐を先触れる雲の影が、動かうとするやうな心もちであつた。

鹿の皮を剝ぎ終つた彼が、宮の中へ帰つたのは、もう薄暗い時分であつた。彼は広い階段（きざはし）を上ると、何時

もの通り何気なく、大広間の戸口に垂れてゐる、白い帷（とばり）を掲げて見た。すると須世理姫と葦原醜男とが、まるで塒（ねぐら）を荒らされた、一羽の睦（むつま）じい小鳥のやうに、倉皇（さうくわう）と菅畳（すがだたみ）から身を起した。彼は苦い顔をしながら、のそのそ部屋の中へ歩を運んだが、やがて葦原醜男の顔へ、じろりと忌々（いまいま）しさうな視線をやると、

「お前は今夜此処へ泊つて、舟旅の疲れを休めて行くが好い。」と、半ば命令的な言葉をかけた。

葦原醜男は彼の言葉に、嬉しさうな会釈（ゑしやく）を返したが、それでもまだ何となく、間の悪げな気色（けしき）は隠せなかつた。

「ではすぐにあちらへ行つて、遠慮なく横になつてくれい。須世理姫——」
素戔嗚は娘を振り返ると、突然嘲（あざけ）るやうな声を出した。
「この男を早速蜂の室（むろ）へつれて行つてやるが好い。」
須世理姫は一瞬間、色を失つたやうであつた。
「早くしないか！」
父親は彼女がためらふのを見ると、荒熊のやうに唸（うな）り出した。
「はい、ではあなた、どうかこちらへ。」
葦原醜男はもう一度、叮嚀に素戔嗚へ礼をすると、

須世理姫の後を追つて、いそいそと大広間を出て行つた。

四

大広間の外へ出ると、須世理姫は肩にかけた領巾(ひれ)を取つて、葦原醜男の手に渡しながら囁くやうにかう云つた。

「蜂の室へ御はひりになつたら、これを三遍御振りなさいまし。さうすると蜂が刺しませんから。」

葦原醜男は何の事だか、相手の言葉がのみこめなか

つた。が、問ひ返す暇もなく、須世理姫は小さな扉を開いて、室の中へ彼を案内した。

室の中はもうまつ暗であつた。葦原醜男は其処へはひると、手さぐりに彼女を捉へようとした。が、手は僅に彼女の髪へ、指の先が触れたばかりであつた。さうしてその次の瞬間には、慌（あわただ）しく扉を閉ぢる音が聞えた。

彼は領巾（ひれ）をたまさぐりながら、茫然（ばうぜん）と室の中に佇（たたず）んでゐた。すると眼が慣れたせゐか、だんだんあたりが思つたより、薄明く見えるやうになつた。

その薄明りに透（すか）して見ると、室の天井からは幾つと

なく、大樽程の蜂の巣が下つてゐた。しかもその又巣のまはりには、彼の腰に下げた高麗剣より、更に一かさ大きい蜂が、何匹も悠々と這ひまはつてゐた。

彼は思はず身を翻(ひるがへ)して、扉の方へ飛んで行つた。が、いくら推(お)しても引いても、扉は開きさうな気色(けしき)さへなかつた。のみならずその時一匹の蜂は、斜に床の上へ舞ひ下ると、鈍い翅音(はおと)を起しながら、次第に彼の方へ這ひ寄つて来た。

余りの事に度を失つた彼は、まだ蜂が足もとまで来ない内に、倉皇とそれを踏み殺さうとした。しかし蜂は其途端に、一層翅音を高くしながら、彼の頭上へ舞

上つた。と同時に多くの蜂も、人のけはひに腹を立てたと見えて、まるで風を迎へた火矢のやうに、ばらばらと彼の上へ落ちかかつて来た。……

須世理姫は広間へ帰つて来ると、壁に差した松明（たいまつ）へ火をともした。火の光は赤々と、菅畳の上に寝ころんだ素戔嗚の姿を照らし出した。

「確に蜂の室へ入れて来たらうな？」

素戔嗚は眼を娘の顔に注ぎながら、また忌々（いまいま）しさうな声を出した。

「私は御父様の御云ひつけに背（そむ）いた事はございません。」

須世理姫は父親の眼を避けて、広間の隅へ席を占めた。

「さうか？　では勿論これからも、おれの云ひつけは背くまいな？」

素戔嗚のかう云ふ言葉の中には、皮肉な調子が交つてゐた。須世理姫は頸珠を気にしながら、背くとも背かないとも答へなかつた。

「黙つてゐるのは背く気か？」

「いいえ。――御父様はどうしてそんな――」

「背かない気ならば、云ひ渡す事がある。おれはお前があの若者の妻になる事を許さないぞ。素戔嗚の娘は

素戔嗚の目がねにかなつた夫を持たねばならぬ。好いか？　これだけの事を忘れるな。」

夜が既に更(ふ)けた後、素戔嗚は鼾(いびき)をかいてゐたが、須世理姫は独り悄然(せうぜん)と、広間の窓に倚(よ)りかかりながら、赤い月が音もなく海に沈むのを見守つてゐた。

五

翌朝素戔嗚は何時(いつ)もの通り、岩の多い海へ泳ぎに行つた。すると其処へ葦原醜男(あしはらしこを)が、意外にも彼の後を追つて、勢よく宮の方から下つて来た。

彼は素戔嗚の姿を見ると、愉快さうな微笑を浮べながら、

「御早うございます。」と、会釈をした。

「どうだな、昨夕(ゆうべ)はよく眠られたかな？」

素戔嗚は岩角に佇(たたず)んだ儘、迂散(うさん)らしく相手の顔を見やつた。実際この元気の好い若者がどうして室の蜂に殺されなかつたか？　それは全然彼自身の推測を超越してゐたのであつた。

「ええ、御かげでよく眠られました。」

葦原醜男はかう答へながら、足もとに落ちてゐた岩のかけを拾つて、力一ぱい海の上へ抛り投げた。岩は

長い弧線を描いて、雲の赤い空へ飛んで行つた。さうして素戔嗚が投げたにしても、届くまいと思はれる程、遠い沖の波の中に落ちた。

素戔嗚は唇を噛みながら、ぢつとその岩の行く方を見つめてゐた。

二人が海から帰つて来て、朝餉（あさげ）の膳に向つた時、素戔嗚は苦い顔をして、鹿の片腿（かたもも）を噛（かじ）りながら、彼と向ひ合つた葦原醜男に、

「この宮が気に入つたら、何日でも泊つて行くが好い。」と云つた。

傍にゐた須世理姫は、この怪しい親切を辞せしむべ

く、そつと葦原醜男の方へ、意味ありげな瞬(またた)きを送つて見せた。が、彼は丁度その時、盤(さら)の魚に箸をつけてゐたせゐか、彼女の相図には気もつかずに、

「難有(ありがた)うございます。ではもう二三日、御厄介になりませうか。」と、嬉しさうな返事をしてしまつた。

　しかし幸ひ午後になると、素戔嗚が昼寝をしてゐる暇に、二人の恋人は宮を抜け出て彼(か)の独木舟(まるきぶね)が繋(つな)いである、寂しい海辺の岩の間に、慌しい幸福を偸(ぬす)む事が出来た。須世理姫は香りの好い海草の上に横はりながら、暫くは唯夢のやうに、葦原醜男の顔を仰いでゐたが、やがて彼の腕を引き離すと、

「今夜も此処に御泊りなすつては、あなたの御命が危うございます。私の事なぞは御かまひなく、一刻も早く御逃げ下さいまし。」と、心配さうに促し立てた。

しかし葦原醜男は笑ひながら、子供のやうに首を振つて見せた。

「あなたが此処にゐる間は、殺されても此処を去らない心算(つもり)です。」

「それでもあなたの御体に、万一の事でもあつた日には――」

「ではすぐにも私と一しよに、この島を逃げてくれますか？」

須世理姫はためらつた。

「さもなければ私は何時までも、此処にゐる覚悟をきめてゐます。」

葦原醜男はもう一度、無理に彼女を抱きよせようとした。が、彼女は彼を突きのけると急に海草の上から身を起して、

「御父様が呼んでゐます。」と、気づかはしさうな声を出した。さうして咄嗟（とつさ）に岩の間を、若い鹿より身軽さうに、宮の方へ上つて行つた。

後に残つた葦原醜男は、まだ微笑を浮べながら、須世理姫の姿を見送つた。と、彼女の寝てゐた所には、

昨夕（ゆうべ）彼が貰つたやうな、領巾（ひれ）がもう一枚落ちてゐた。

六

その夜素戔嗚は人手を借らず、蜂の室（むろ）と向ひ合つた、もう一つの室の中に、葦原醜男を抛りこんだ。

室の中は昨日の通り、もう暗黒（くらやみ）が拡がつてゐた。が、唯一つ昨日と違つて、その暗黒の其処此処には、まるで地の底に埋もれた無数の宝石の光のやうに、点々ときらめく物があつた。

葦原醜男は心の中に、この光物（ひかりもの）の正体を怪しみな

がら、暫くは眼が暗黒に慣れる時の来るのを待つてゐた。すると間もなく彼の周囲が、次第にうす明くなるにつれて、その星のやうな光物が、殆ど馬さへ呑みさうな、凄じい大蛇(をろち)の眼に変つた。しかも大蛇は何匹となく、或は梁(はり)に巻きついたり、或は桷(たるき)を伝はつたり、或は又床にとぐろを巻いたり、室一ぱいに気味悪く、蠢(うごめ)き合つてゐるのであつた。

　彼は思はず腰に下げた剣の柄(つか)に手をかけた。が、たとひ剣を抜いた所が、彼が一匹斬る内には、もう一匹が造作なく彼を巻き殺すのに違ひなかつた。いや、現に一匹の大蛇が、彼の顔を下から覗きこむと、それよ

り更に大きい一匹は、梁に尾をからんだ儘、ずるりと宙に吊り下つて、丁度彼の肩の上へ、鎌首をさしのべてゐるのであつた。

　室の扉は勿論開かなかつた。のみならずその後には、あの白髪の素戔嗚が、皮肉な微笑を浮べながら、ぢつと扉の向うの容子に耳を傾けてゐるらしかつた。葦原醜男は懸命に剣の柄を握りながら、暫時は眼ばかり動かせてゐた。その内に彼の足もとの大蛇は、徐(おもむろ)に山のやうなとぐろを解くと、一際(ひときは)高く鎌首を挙げて、今にも猛然と彼の喉へ噛みつきさうなけはひを示し出した。

この時彼の心の中には、突然光がさしたやうな気がした。彼は昨夜室の蜂が、彼のまはりへ群がつて来た時、須世理姫に貰つた領巾（ひれ）を振つて、危い命を救ふ事が出来た。してみればさつき須世理姫が、海辺の岩の上に残して行つた領巾にも、同じやうな奇特（きどく）があるかも知れぬ。——さう思つた彼は咄嗟の間に、拾つて置いた領巾を取出して、三度ひらひらと振り廻して見た。

……

翌朝素戔嗚は又石の多い海のほとりで、愈（いよいよ）元気の好ささうな葦原醜男と顔を合せた。

「どうだな。昨夜（ゆうべ）はよく眠られたかな？」

「ええ。御かげでよく眠られました。」
素戔嗚は顔中に不快さうな色を漲(みなぎ)らせて、じろりと相手を睨みつけたが、どう思つたかもう一度、何時もの冷静な調子に返つて、
「さうか。それはよかつた。ではこれからおれと一しよに、一泳ぎ水を浴びるが好い。」と隔意なささうな声をかけた。
二人はすぐに裸になつて、波の荒い明け方の海を、沖へ沖へと泳ぎ出した。素戔嗚は高天原の国にゐた時から、並ぶもののない泳ぎ手であつた。が、葦原醜男は彼にも増して、殆ど海豚(いるか)にも劣らない程、自由自在

に泳ぐ事が出来た。だから二人のみづらの頭は、黒白二羽の鷗（かもめ）のやうに、岩の屏風（びやうぶ）を立てた岸から、見る見る内に隔たつてしまつた。

七

海は絶えず膨（ふく）れ上つて、雪のやうな波の水沫（しぶき）を二人のまはりへ漲（みなぎ）らせた。素戔嗚はその水沫の中に、時々葦原醜男の方へ意地悪さうな視線を投げた。が、相手は悠々とどんなに高い波が来ても、乗り越え乗り越え進んでゐた。

それが暫く続く内に、葦原醜男は少しづつ素戔嗚より先へ進み出した。素戔嗚は私（ひそか）に牙（きば）を噛んで、一尺でも彼に遅れまいとした。しかし相手は大きな波が、二三度泡を撒き散らす間に、苦もなく素戔嗚を抜いてしまつた。さうして重なる波の向うに、何時の間にか姿を隠してしまつた。

「今度こそあの男を海に沈めて、邪魔を払はうと思つたのだが、――」

さう思ふと素戔嗚は、愈（いよいよ）彼を殺さない内は、腹が癒（い）えないやうな心もちになつた。

「畜生！　あんな悪賢い浮浪人は、鰐（わに）にでも食はして

しまふが好い。」

しかし程なく葦原醜男は、彼自身がまるで鰐のやうに、楽々とこちらへ返つて来た。

「もつと御泳ぎになりますか?」

彼は波に揺られながら、日頃に変らない微笑を浮べて、遙に素戔嗚へ声をかけた。素戔嗚は如何に剛情を張つても、この上泳がうと云ふ気にはなれなかつた。

……

その日の午後素戔嗚は、更に葦原醜男をつれて、島の西に開いた荒野(あらの)へ、狐や兎を狩りに行つた。

二人は荒野のはづれにある、小高い大岩の上へ登つ

た。荒野は目の及ぶ限り、二人の後から吹下す風に、枯草の波を靡かせてゐた。素戔嗚は少時黙然と、さう云ふ景色を見守つた後、弓に矢を番へながら、葦原醜男を振り返つた。

「風があつて都合が悪いが、兎に角どちらの矢が遠く行くか、お前と弓勢を比べて見よう。」

「ええ、比べて見ませう。」

葦原醜男は弓矢を執つても、自信のあるらしい容子であつた。

「好いか？　同時に射るのだぞ。」

二人は肩を並べながら、力一ぱい弓を引き絞つて、

さうして同時に切つて離した。矢は波立つた荒野の上へ、一文字に遠く飛んで行つた。が、どちらが先へ行つたともなく、唯一度日の光にきらりと矢羽根が光つた儘、忽（たちま）ち風下の空に紛れて、二本とも一しよに消えてしまつた。

「勝負があつたか？」

「いいえ――もう一度やつて見ませうか？」

素戔嗚は眉をひそめながら、苛立（いらだ）たしさうに頭を振つた。

「何度やつても同じ事だ。それより面倒でも一走り、おれの矢を探しに行つてくれい。あれは高天原の国か

ら来た、おれの大事な丹塗（にぬり）の矢だ。」

葦原醜男は云ひつかつた通り、風に鳴る荒野へ飛びこんで行つた。すると素戔嗚はその後姿が、高い枯草に隠れるや否や、腰に下げた袋の中から、手早く火打鎌と石とを出して、岩の下の枯茨（かれいばら）へ火を放つた。

八

色のない焔は瞬（またた）く内に、濛々（もうもう）と黒煙を挙げ始めた。と同時にその煙の下から、茨や小篠（をざさ）の焼ける音が、けたたましく耳を弾（はじ）き出した。

「今度こそあの男を片づけたぞ。」

素戔嗚は高い岩の上に、ぢつと弓杖(ゆんづゑ)をつきながら、兇猛な微笑を浮べてゐた。

火は益(ますます)燃え拡がつた。鳥は苦しさうに鳴きながら、何羽も赤黒い空へ舞ひ上つた。が、すぐに又煙に巻かれて、紛々と火の中へ落ちて行つた。それがまるで遠くからは、嵐に振はれた無数の木の実が、しつきりなくこぼれ飛ぶやうに見えた。

「今度こそあの男を片づけたぞ。」

素戔嗚はかう心の中(うち)に、もう一度満足の吐息を洩らすと、何故か云ひやうのない寂しさがかすかに湧いて

来るやうな心もちがした。……

その日の薄暮、勝ち誇つた彼は腕を組んで、宮の門に佇みながら、まだ煙の迷つてゐる荒野の空を眺めてゐた。すると其処へ須世理姫が、夕餉（ゆふげ）の仕度の出来たことを気がなささうに報じに来た。彼女は近親の喪（も）を弔ふやうに、何時の間にかまつ白な裳（も）を夕明りの中に引きずつてゐた。

素戔嗚はその姿を見ると、急に彼女の悲しさを踏みにじりたいやうな気がし出した。

「あの空を見ろ。葦原醜男は今時分——」

「存じて居ります。」

須世理姫は眼を伏せてゐたが、思ひの外はつきりと、父親の言葉を遮(さへぎ)つた。

「さうか？　ではさぞかし悲しからうな？」

「悲しうございます。よしんば御父様が御歿(おな)くなりなすつても、これ程悲しくございますまい。」

素戔嗚は色を変へて、須世理姫を睨(にら)みつけた。が、それ以上彼女を懲(こ)らす事は、どう云ふものか出来なかつた。

「悲しければ、勝手に泣くが好い。」

彼は須世理姫に背を向けて、荒々しく門の内へはひつて行つた。さうして宮の階段(きざはし)を上りながら、忌々(いまいま)し

さうに舌を打つた。

「何時ものおれなら口も利かずに、打ちのめしてやる所なのだが……」

須世理姫は彼の去つた後も、暫くは、暗く火照（ほて）つた空へ、涙ぐんだ眼を挙げてゐたが、やがて頭を垂れながら、悄然（せうぜん）と宮へ帰つて行つた。

その夜素戔嗚は何時までも、眠に就く事が出来なかつた。それは葦原醜男を殺した事が、何となく彼の心の底へ毒をさしたやうな気がするからであつた。

「おれは今までにもあの男を何度殺さうと思つたかわからない。しかしまだ今夜のやうに、妙な気のした事

はないのだが……」

彼はこんな事を考へながら、青い匂のする菅畳の上に、幾度となく寝返りを打つた。眠はそれでも彼の上へ、容易に下らうとはしなかつた。

その間に寂しい暁は早くも暗い海の向うに、うすら寒い色を拡げ出した。

九

翌朝もう朝日の光が、海一ぱいに当つてゐる頃であつた。まだ寝の足りない素戔嗚は眩(まぶ)しさうに眉をひそ

めながら、のそのそ宮の戸口へ出かけて来た。すると其処の階段(きざはし)の上には、驚くまい事か、葦原醜男が、須世理姫と一しよに腰をかけて、何事か嬉しさうに話し合つてゐた。

二人も素戔嗚の姿を見ると、吃驚(びつくり)したらしい容子であつた。が、すぐに葦原醜男は不相変(あひかはらず)快活に身を起して、一筋の丹塗矢(にぬりや)をさし出しながら、

「幸ひ矢も見つかりました。」と云つた。

素戔嗚はまだ驚きが止まなかつた。しかしその中にも何となく、無事な若者の顔を見るのが、悦(よろこ)ばしいやうな心もちもした。

「よく怪我をしなかつたな？」

「ええ。全く偶然助かりました。あの火事が燃えて来たのは、丁度私がこの丹塗矢を拾ひ上げた時だつたのです。私は煙の中をくぐりながら、兎も角火のつかない方へ、一生懸命に逃げて行きましたが、いくらあせつて見た所が、到底西風に煽（あふ）られる火よりも早くは走られません。……」

葦原醜男はちよいと言葉を切つて、彼の話に聞き入つてゐる親子の顔へ微笑を送つた。

「そこでもう今度は焼け死ぬに違ひないと、覚悟をきめた時でした。走つてゐる内にどうしたはずみか、急

に足もとの土が崩れると、大きな穴の中へ落ちこんだのです。穴の中は最初まつ暗でしたが、縁(ふち)の枯草が燃えるやうになると、忽ち底まで明くなりました。見ると私のまはりには、何百匹とも知れない野鼠が、土の色も見えない程ひしめき合つてゐるのです……。」

「まぁ、野鼠でよろしうございました。それが蝮(まむし)ででもございましたら……」

須世理姫の眼の中には、涙と笑とが刹那(せつな)の間、同時に動いたやうであつた。

「いや、野鼠でも莫迦(ばか)にはなりません。この丹塗矢の羽根のないのは、その時みんな食はれたのです。が、

仕合せと火事は何事もなく、穴の外を焼き通つてしまひました。」

　素戔嗚はこの話を聞いてゐる内に、だんだん又この幸運な若者を憎む心が動いて来た。のみならず、一度殺さうと思つた以上、どうしてもその目的を遂げない中は、昔から挫折した覚えのない意力の誇りが満足しなかつた。

「さうか。それは運が好かつたな。が、運と云ふものは、何時（いつ）風向きが変るかわからないものだ。……が、そんな事はどうでも好い。兎に角命が助つたのなら、おれと一しよにこちらへ来て、頭の虱（しらみ）をとつてくれ

い。」

　葦原醜男と須世理姫とは、仕方なく彼の後について、朝日の光のさしこんでゐる、大広間の白い帷（とばり）をくぐつた。

　素戔嗚は広間のまん中に、不機嫌らしい大あぐらを組むと、みづらに結んだ髪を解いて、無造作に床の上に垂らした。素枯（すが）れた蘆の色をした髪は、殆ど川のやうに長かつた。

「おれの虱はちと手強（てごは）いぞ。」

　かう云ふ彼の言葉を聞き流しながら、葦原醜男はその白髪を分けて、見つけ次第虱を捻（ひね）らうとした。が、

髪の根に蠢(うごめ)いてゐるのは、小さな虱と思ひの外、毒々しい、銅色(あかがねいろ)の、大きな百足(むかで)ばかりであつた。

十

葦原醜男はためらつた。すると側にゐた須世理姫が、何時の間に忍ばせて持つて来たか、一握りの椋(むく)の実と赤土とをそつと彼の手へ渡した。彼はそこで歯を鳴らして、その椋の実を噛みつぶしながら、赤土も一しよに口へ含んで、さも百足をとつてゐるらしく、床の上へ吐き出し始めた。

その内に素戔嗚は、昨夕（ゆうべ）寝なかつた疲れが出て、我知らずにうとうと眠にはひつた。

……高天原の国を逐（お）はれた素戔嗚は、爪を剥がれた足に岩を踏んで、嶮しい山路を登つてゐた。岩むらの羊歯（しだ）、鴉（からす）の声、それから冷たい鋼色（はがねいろ）の空、――彼の眼に入る限りの風物は、悉（ことごと）く荒涼それ自身であつた。

「おれに何の罪があるか？　おれは彼等よりも強かつた。が、強かつた事は罪ではない。罪は寧（むし）ろ彼等にある。嫉妬心の深い、陰険な、男らしくもない彼等にある。」

彼はかう憤りながら、暫く苦しい歩みを続けて行つ

た。と、路を遮(さへぎ)つた、亀の背のやうな大岩の上に、六つの鈴のついてゐる、白銅鏡が一面のせてあつた。彼はその岩の前に足をとめると、何気なく鏡へ眼を落した。鏡は冴(さ)え渡つた面(おもて)の上に、ありありと年若な顔を映した。が、それは彼の顔ではなく、彼が何度も殺さうとした、葦原醜男の顔であつた。……さう思ふと、急に夢がさめた。

　彼は大きな眼を開いて、広間の中を見廻した。広間には唯朝日の光が、うららかにさしてゐるばかりで、葦原醜男も須世理姫も、どうしたか姿が見えなかつた。のみならずふと気がついて見ると、彼の長い髪は三つ

に分けて、天井の桷(たるき)に括(くく)りつけてあつた。

「欺(だま)しをつたな！」

咄嗟(とつさ)に一切悟つた彼は、稜威(いつ)の雄(を)たけびを発しながら、力一ぱい頭(かしら)を振つた。すると忽ち宮の屋根には、地震よりも凄まじい響が起つた。それは髪を括(くく)りつけた、三本の桷(たるき)が三本とも一時にひしげ飛んだ響であつた。しかし素戔嗚は耳にもかけず、まづ右手をさし伸べて、太い天(あめ)の鹿児弓(かごゆみ)を取つた。それから左手をさし伸べて、天(あめ)の羽羽矢(はばや)の靫(ゆぎ)を取つた。最後に両足へ力を入れて、うんと一息に立ち上ると、三本の桷を引きずりながら、雲の峰の崩れるやうに、傲然と宮の外へ

揺るぎ出した。

宮のまはりの椋の林は、彼の足音に鳴りどよんだ。それは梢に巣食つた栗鼠（りす）も、ばらばらと大地に落ちる程であつた。彼はその椋の木の間を、嵐のやうに通り抜けた。

林の外は切り岸の上、切り岸の下は海であつた。彼は其処に立ちはだかると、眉の上に手をやりながら、広い海を眺め渡した。海は高い浪の向うに、日輪さへかすかに蒼（あを）ませてゐた。その又浪の重なつた中には、見覚えのある独木舟（まるきぶね）が一艘、沖へ沖へと出る所だつた。

素戔嗚は弓杖（ゆんづゑ）をついたなり、ぢつとこの舟へ眼を注

いだ。舟は彼を嘲（あざけ）るやうに、小さい筵帆（むしろぼ）を光らせながら、軽々と浪［＃「浪」は底本では「氵＋良」］を乗り越えて行つた。のみならず舳（とも）には葦原醜男、艫（へさき）には須世理姫の乗つてゐる容子も、手にとるやうに見る事が出来た。

　素戔嗚は天の鹿児弓に、しづしづと天の羽羽矢を番（つが）へた。弓は見る見る引き絞られ、鏃（やじり）は目の下の独木舟に向つた。が、矢は一文字に保たれた儘、容易に弦（つる）を離れなかつた。その内に何時（いつ）か彼の眼には、微笑に似たものが浮び出した。微笑に似た、――しかし其処には同時に又涙に似たものもないではなかつた。彼は

肩を聳(そび)やかせた後、無造作に弓矢を抛り出した。それから、――さも堪へ兼ねたやうに、瀑(たき)よりも大きい笑ひ声を放つた。

「おれはお前たちを祝(ことほ)ぐぞ！」

素戔嗚は高い切り岸の上から、遥かに二人をさし招いだ。

「おれよりももつと手力(たぢから)を養へ。おれよりももつと智慧(ちゑ)を磨け。おれよりももつと、……」

素戔嗚はちよいとためらつた後、底力のある声に祝ぎ続けた。

「おれよりももつと仕合せになれ！」

彼の言葉は風と共に、海原の上へ響き渡つた。この時わが素戔嗚は、大日孁貴と争つた時より、高天原の国を逐はれた時より、高志の大蛇を斬つた時より、ずつと天上の神々に近い、悠々たる威厳に充ち満ちてゐた。

（大正九年）

底本：「現代日本文学大系43芥川龍之介集」筑摩書房
１９６８（昭和43）年８月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年1月17日公開
２００４年2月18日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。